

八田 進二 著

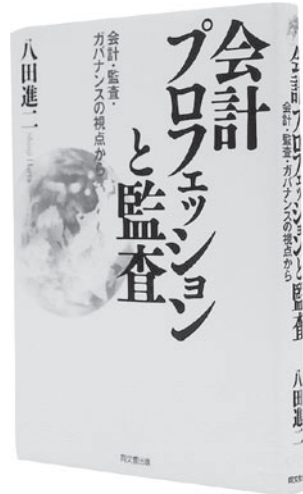
(大学院会計プロフェッション研究科教授)

『会計プロフェッションと監査』

—会計・監査・ガバナンスの視点から—

同文館出版 2009年8月刊 3,360円

〔評者〕町 田 祥 弘



本書は、著者が長年にわたって執筆してきた研究論文を、還暦を迎えるに当たって棚卸しして再構成した論文集である。副題にもあるとおり、本書は、「第一部 会計上の課題」、「第二部 監査上の課題」および「第三部 コーポレート・ガバナンス上の課題」から構成されている。

本書の「序」において著者も述べているとおり、日本では、ディスクロージャー制度を語る場合に、まず会計または開示基準等の問題が取り上げられ、次いでそれらに従って作成される情報の信頼性の問題が取り上げられることが一般的である。しかしながら、現代の会計・監査の領域、とくに2002年にアメリカで制定されたサーベイナイズメントスリー法以後の状況下では、開示される情報の作成方法（会計基準）や情報の適正性のチェック方法（監査基準）の議論に先立つ、企業内の情報の作成プロセスの適正化、つまり、内部統制をはじめとするコーポレート・ガバナンスの議論を避けて通ることはできない。

本書の第三部からは、金融庁企業会計審議会内部統制部会長として、日本の内部統制報告制度の創設に中心的役割を果たした著者が、内部統制の制度化の議論が提起される遙か以前から、内部統制の問題に国際的視野をもって取り組んできたこと、および適正なディスクロージャーの実施に当たっては、企業内における自律的な会計情報の作成プロセスの整備が必要であるという、著者の一貫した考え方が

を理解することができるであろう。

一方、本書の第一部および第二部で取り上げられている会計および監査の領域についても、単に、会計基準等の比較制度的な検討が行われているわけではない。第一部では、会計情報の範囲の拡大や、そこに含まれる見積り要素の増加、さらには、会計操作の問題等のディスクロージャーに関する今日的な課題が取り上げられ、続く第二部では、それらに対する情報の信頼性の確保をいかに図るかという観点から、不正摘発型の監査や内部監査、保証業務の拡大等の問題が論じられているのである。こうした一連の考察における著者の立場は、今日の変革の渦中にあるディスクロージャー制度にあっても、それらを担うべきは専門知識と高い倫理観を保持した会計プロフェッション（公認会計士等の会計職業専門家）以外にはなく、一方、更なる重い責任を課せられる会計プロフェッションに対しては、その独立不羈の判断をあくまでも尊重するという点にあると解される。

本書は、今後、国際会計基準の導入等の大きな変革が予定されている日本の資本市場まわりの議論に当たって、数多くの貴重な内容を含む研究書であるとともに、そこでは、会計・監査・ガバナンスという、いわば三位一体の議論が欠かせないことを読者に実感させる啓発の書ともなっている。

是非、ご一読をお薦めしたい。

（大学院会計プロフェッション研究科教授）